

## 正岡子規



明治33年頃の子規の自画像

### 『正岡子規』

- ◇慶応元年(1867) 9月17日、伊予国温泉郡藤原新町(現松山市花園町3番5号)に正岡常尚、八重の次男として生まれる。
- ◇明治元年(1868) 湊町新町に転居
- ◇明治3年(1870) 妹、律誕生
- ◇明治6年(1872) 3月、父死去
- ◇明治7年(1874) 祖父大原観山の私塾へ通い素読を習う
  
- ◇明治11年(1878) 始めて漢詩を作る
- ◇明治12年(1879) 回覧雑誌「桜亭雑誌」「松山雑誌」などを作る
  
- ◇明治13年(1880) 松山中学入学。竹村鍛(河東碧梧桐)らと漢詩のグループ「同心会」を結成し、河東静溪(河東碧梧桐の父)の指導を受ける
  
- ◇明治16年(1883) 叔父、加藤拓川に東京遊学を懇願し、同意を得る松山中学を中退し、6月上京。拓川

の紹介で、陸敬南(くがかつなん)を訪ねる。須田学舎、  
共立学校(今の開成中学)に学ぶ

◇明治17年(1884) 随筆「筆まかせ」を書き始める。  
9月、東京大学予備門(後の第一高等学校)に入学。  
米ベースボールに出会い、左腕の投手、捕手としてな  
らした。のちの明治29年の新聞に野球ルールの紹介  
記事を書き、「打者」「走者」「飛球」などの訳語を編み  
出した。「野球」は子規の幼名「升(のぼる)」をもじって  
「の.ぼーる」のペンネームを使ったことから、野球の名  
付け親という

◇明治18年(1885) 哲学を志望する。七月帰省中  
に井出真棹に和歌を習う。俳句を作り始める



明治18年、帰郷の際に撮った写真。母八重4  
0歳

松山藩の儒者、大原観山の長女として生まれ  
る。夫の死後、実家の大原家の庇護を受けるが、八重  
自信は裁縫を教え家計を補っていた。子規については  
「小さい時分にはよっぽどへぼでへぼで弱味憎でござ  
いました」と回想している

◇明治20年(1887) 帰省中に俳句を大原其戒に学  
ぶ

◇明治21年(1888) 第一高等中学校予科を卒業。  
八月、鎌倉に赴き始めて咯血する。  
九月本科に進学、常磐会宿舎に入る

◇明治22年(1889) 夏目漱石と交流が始まる。  
「余が漱石と共に高等中学校に居た頃漱石の内をおと  
づれた。漱石の内は牛込の喜久井町で田圃からは1  
丁か2丁しかへだたつてゐない処である。漱石は子供  
の時分からそこに成長したのだ。余は漱石と二人田圃  
を散歩して早稲田から関口の方へ往たが大方六月頃

の事であつたらう。そこらの水田に植ゑられた苗がそよ  
いで居るのは誠に善い心持ちであつた。この時余が驚  
いた事は、漱石は、我々が平生喰う所の米はこの苗の  
実である事を知らなかつたといふ事である。都人士の  
菽麦(しゆくばく)を弁ぜらる事は往々この類である。も  
し都の人が一匹の人間にならうといふのはどうしても一  
度は鄙住居(ひなずまい)をせねばならぬ。」「墨汁一  
滴」五月三十日

五月、咯血が一週間つづき、「子規」の号を使い始める。  
夏帰省し、静養。この頃より俳句分類に取り組む

◇明治23年(1890) 河東碧梧桐の句を指導。第一  
高等中学校本科を卒業し、帝国大学文科哲学科に入  
学

◇明治24年(1891) 哲学科から国文科に転科。高  
浜虚子と文通が始まる。十一月、「猿蓑」に感動、武蔵  
野を旅して写実的な俳句を作った



河東碧梧桐(明治6年～昭和12年)松  
山出身。少年時代、漢学者である父のと  
ころに学びに来ていた。子規と知りあう。  
子規の文学熱に強い影響を受け、俳句  
革新に加わる。子規没後は虚子とともに  
子規門の双璧と目された



高浜虚子(明治7年～昭和34年)  
松山出身。明治24年、河東碧梧  
桐を介して子規を知る。子規の期  
待と愛情が深く、子規が自らの後  
継者にと望んだが辞退する。子規

俳人グループの代表格

◇明治25年(1892) 上根岸88番地(陸歌南の隣り、3年前には森鷗外が住んでいたところ)に転居。「かけはしの記」を新聞「日本」に連載し、俳句改革に着手する。11月、母八重と妹律が上京し、同居を始める。12月、日本新聞社に入社

「我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控えたり。場末の家まばらに建てられたれば青空は庭の外に拡がりて雲行き鳥翔る様もいとゆたかに眺められる。初めてここに移りし頃はわずかに竹藪を開きたる裸の庭なりしを、やがて家主たる人の小松三本を栽えてやや物めかしたるに、隣の老媪の与えたる薔薇の苗さえ植え添えて四、五輪の花に吟興を鼓せらるることも多かりき」

『小園の記』

◇明治26年(1893) 新聞「日本」に俳句欄を新設。帝国大学を退学。「瀬祭書屋俳話」刊行、夏1ヶ月の東北旅行。「はてしらずの記」「芭蕉雑談」「文界八つあたり」を発表

◇明治27年(1894) 上根岸82番地に転居。「この頃根岸倶楽部より出版せられたる根岸の地図は大槻博士の製作に係り、地理の精細に考証の確実なるのみならずわれら根岸人に取りてはいと面白く趣ある者なり。我らの住みたる処は今鶯横町といへども昔は狸横町といへりとぞ。田舎路はまがりくねりておとづる人のたづねわぶること吾が根岸のみかは、抱一が句に「山茶花や根岸はおなじ垣つゞき」また「さざん花や

根岸たづねる革ふばこ」また一種の風趣ならずや、さらに今は名物なりし山茶花かん竹の生垣もほとほとその影をとどめず今めかしき石煉瓦の垣さへ作り出られ名ある樹木はこじ去られ古への奥州路の地蔵などもてはやされしも取りのけられ鶯の巢は鉄道のひびきにゆりおとされ水鶏(くいな)の声も汽笛にたたきつぶされ、およそ風致といふ風致は次第に失せてただ細道のくねりたるのみぞ昔のままなり云々 と博士は記せり。中にも鶯横町はくねり曲がりて殊に分かりにくき処なるに尋ね迷いて空しく帰る俗客もあるべしかし。」『墨汁一滴』一月一八日

子規が編集責任者となり、「小日本」を創刊。洋画家、中村不折と知り合う。

「余の始めて不折君と相見しは明治二十七年三月頃の事にしてその場所は神田淡路町小日本新聞社の桜上にてありき。始め余の新聞「小日本」に従事するや適當なる画家を得る事において最も困難を感ぜり。当時の美術学校の生徒の如きは余らの要求を充たす能わず、そのほか浮世画工を除けば善くも悪くも画工らしき者殆ど世になかりしなり。この時に不折君を紹介せられしは浅井氏なり。(中略) . . . 君が服装のきたなきと耳の遠きことは君が常識を求むる能はずして非常の困窮に陥りし所以なるが、余が相識るの後も一般の人は君を厭ひあるいは君を輕蔑し、余ら傍にありて不折君に対し甚だ氣の毒に思ひし事も少からず。されど君が画における伎倆(ぎりょう)は次第にあらわれ来り何人もこれに対しての賞賛を首肯(しゅこう)せざる能はざるほどになりぬ。達磨百題、犬百題、その他何十題、何五十題といふが如き、あるいは瓦当その他の模様 of 意匠の如き、いよいよ出でていよいよ奇に、滾々(こんこん)としてその趣向の尽きざるを見て、素人も玄人も舌を捲いて驚かざるはなし。六月二七日『墨汁一滴』

河東碧梧桐、高浜虚子が二高を退学し上京してくる。  
八月、日清戦争が勃発する

◇明治28年(1895) 四月、従軍記者として旅順、金州へ赴き、軍医部長森鷗外と会う。

五月、帰国の船中で喀血、下旬神戸に上陸し、入院。一時重体に陥るが、のちやや回復し須磨保養院へ移る。

八月下旬松山に帰省し、愚陀仏庵で漱石と五十日ばかり過ごし、地元で連日句会を催す。

十月、東京への帰途、奈良に遊ぶ。「俳諧大要」を連載  
奈良法隆寺門前で詠んだ句、「柿食へば鐘が鳴るなり  
法隆寺」

「此の時は柿が盛んになってをる時で、奈良にも奈良近辺の村にも柿の木が見えて何ともいへない趣であった。柿などといふものは、従来詩人にも歌よみにも見離されてをるもので、殊に奈良に柿を配合するといふ様な事は思ひもよらなかった事である」(明治34年 くだもの)



中村不折

慶応2年(1866)  
東京生まれ。洋画家。浅井忠、小中正



森鷗外

従軍記者として旅順、金州へ赴き、軍



夏目漱石

東京大学予備門で知り合う。子規の故郷松山中学で教鞭

太郎らに学んだ。浅井忠の紹介で子規と知り合い、「小日本」「ホトギス」に挿絵を描き、子規に写生を教えた。明治34年パリに留学、子規の死後38年に帰国。昭和18年没。不折旧居は子規宅の斜め前にあって現在は書道博物館となって、不折の40年余りの内外の書道史研究上重要なコレクションを展示している

医部長森鷗外と知り合う  
鷗外の遺言には、「. . . 森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ. . .」

をとる  
漱石の作家デビュー作「吾輩は猫である」は子規没後、「ホトギス」から発表された。挿絵は中村不折である  
夏目漱石が不折にあてた手紙、「拝啓かねて御面倒相願候『吾輩は猫である』義発売の間より20日にして初版売切れ只今二版印刷中のよし. . . 10月29日夜 金 不折画伯」差出人は本郷駒込千駄木1-15  
7 夏目金之助

◇明治29年(1896) 左腰が腫れて痛み、歩行困難になり、仰臥の姿勢となる。三月、脊椎カリエスとの診断を受ける。「日本」に、「松羅玉液」の連載を始める。佐々木信綱、与謝野鉄幹らの新体詩人の会に人力車で出席した

◇明治30年(1897) 三月二十七日、腹部の手術、四月になり、医者に談話を禁じられる。四月下旬再手術。「日本」に「俳人蕪村」を連載。五月、病状が悪化し、虚脱状態に陥る。九月臀部に二カ所穴があき膿が出

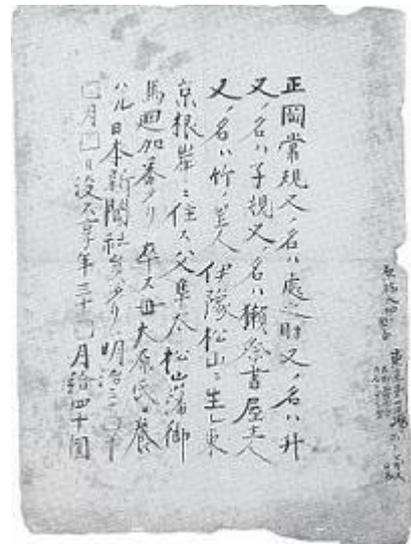
始める。子規庵で第一回蕪村忌が開催される

◇明治31年(1898)「日本」に「歌よみに与ふる書」を  
発表し、短歌改革に乗り出す。  
「近来和歌は一向に振ひ不申候」「貫之は下手な歌よ  
みにて『古今集』はくだらぬ集に有之候」

子規庵で始めて歌会を催す。七月、自らの墓誌銘を記  
し、河東銚宛に送る



明治30年第一回蕪村忌での写真  
前列右端高浜虚子、中列右から4人目が子規、後列右  
端河東碧梧桐



自らの墓誌銘を記し、河東銚宛に送  
る。  
東京田端、大龍寺の墓所に刻まれ  
ている

◇明治32年(1899)「俳諧大要」刊行。五月、病状  
悪化し、寝返りも困難になる。秋、水彩画「秋海棠」を描  
く。十二月、「俳人蕪村」刊行。この年、人力車で度々  
外出する



子規庵縁側にて(明治32年6月)

「五月十五日は上根岸三島神社の祭礼であって、この日は毎年の例によって雨が降りだした。しかも豆腐汁木の芽あへの御馳走に、一杯の葡萄酒を傾けたのはいつにない愉快であったので、... 氏祭これより根岸蚊の多き」当時の根岸は近くに藪があつて夏は蚊が多かった。



中村不折画、病床の子規

◇明治33年(1900) 子規庵歌会に伊藤左千夫、長塚節らが加わる。「日本」に「叙事詩」を発表し、写生文を提唱する。写生文集「寒玉集」刊行。



伊藤左千夫(元治元年～大正二)

千葉県生まれ。搾乳業者。明治33年、子規庵を訪ね、「万葉集」輪講、根岸短歌会に参加。子規の熱烈な崇拜者となる。代表作「野菊の墓」の挿絵は中村不折である



長塚節(明治十二～大正四)

茨城県出身。神経衰弱から水戸の中学を退学後、短歌を作り始める。子規の「歌よみに与ふる書」に敬服し、子規庵を訪ねる。子規晩年の愛弟子。小説「土」で知られる

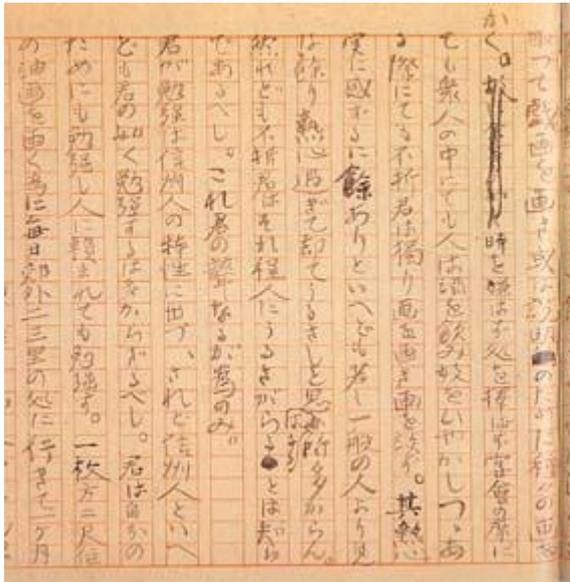
◇明治34年(1901)「日本」に「墨汁一滴」を連載。  
五月下旬から病状悪化。

九月二日「仰臥漫録」を書き始める。

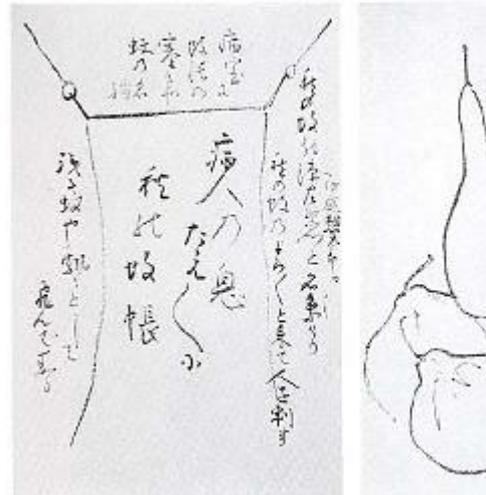
十月頃から、精神状態が不安定になり、時に絶叫、号泣するようになる。麻痺財を飲み痛みをやわらげながらの生活が続く。

「余は左向きに寝たまま前の硯箱を見ると、四、五本の秃筆一本の験温器の外に二寸ばかりの鈍い小刀と二寸ばかりの千枚通しの錐(きり)とは、しかも筆の上にあられて居る。... 錐で心臓に穴をあけても死ぬるには違ひないが、長く苦しんでは困るから穴を三つか四つあけたら直ぐに死ぬるであらうかと、色々に考えて見るが実は恐ろしさが勝つのでそれと決心することも

出来ぬ。死は恐ろしくはないのであるが、苦しみが恐ろしいのだ。．．「仰臥漫録」明治34年10月13日



各自専門の芸術技術に熱心なる人は少なくあらねど不折君の画におけるほど熱心なるは少かるべし。．．（明治34年6月29日）「墨汁一滴」原稿



明治34年9月2日から書き始めた「仰臥漫録」。「病人の息たえ／＼に秋の蚊帳 秋の蚊のよろ／＼と来て人を刺す」(左、明治34年9月20日)「前日来痛かりし腸骨下の痛みいよいよ烈しく堪られず この日包帯とりかへのとき号泣多事、いふ腐敗したる部分の皮がガーゼに付着したるなりと背に下の穴も痛みあり体をどちらへ向けても痛くてたまらず この日風雨夕顔一、千瓢二落つ」(右、同10月7日)

◇明治35年(1922) 一月 病状悪化、連日麻痺剤を服用

三月 腹部の穴を見て驚き泣く。三月末より、虚子、左千夫らが輪番で看病に付く

五月五日「日本」に「病牀六尺」の連載開始、死の二  
日前まで書く



「病牀六尺」原稿。

「病牀六尺、これが我世界である。しかもこの六尺の病牀が余には広過ぎるのである。わずかに手を延ばして畳に触れる事はあるが、布団の外へまで足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。甚だしい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も体の動けない事がある。苦痛、煩悶、号泣、麻痺剤、わずかに一条の活路を死路の内に求めて少しの安楽を貪る果敢なき、それでも生きて居ればいい事はいいもので、毎日見るものは新聞雑誌に限って居れど、それさえ読めないで苦しんで居る時も多いが、読めば腹の立つ事、癢にさわる事、たまには何となく嬉しくてために病苦を忘るような事が無いでもない。年が年中、しかも六年の間世間も知らずに寝て居た病人の感じはまずこんなものですと前置きして」(明治35年5月5日)

六月「菓物帖」を始める。その後、「草花帖」「玩具帖」と写生をつづける

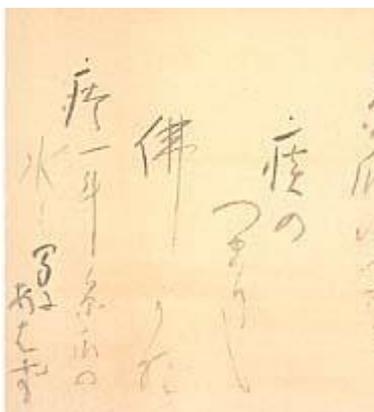


秋海棠「草花帖」より(35年8月)

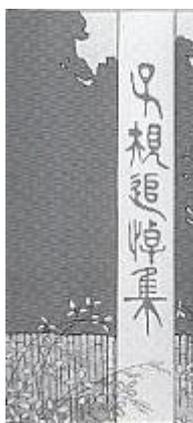


翡翠菊(えぞぎく)と石竹(せきちく)「草花帖」より(35年8月)

九月十日 枕元で蕪村輪講会を開く。十八日、「絶句三句」を記す。十九日、午前一時頃、永眠



絶筆三句



「ほととぎす」子規追悼集



田端の大龍寺「子規居士之墓」右は母「八重」

別冊「太陽」「病牀六尺の人生」監修. 坪内稔典より